

教訓は生かされてきたのか？：想定外を想定すること

私見ですが、マスコミの好きな言葉の一つに、“想定外”があります。ただ、少なくとも筆者の手元にある3冊の国語辞典（「広辞苑」、第7版、2018、も含む）には、“想定”という用語はありますが、“想定外”という言葉は見当たりません。ということは、想像ですが、“想定外”という用語は、マスコミが作ったもので、それが広くいきわたっているのではないのでしょうか？

ところで、本題です。令和5年9月8日の午後から9日の朝にかけて、日立市は猛烈な雨に見舞われました。観測した雨量は、1時間雨量が97ミリ、24時間雨量は268ミリと、日立市の観測史上最大の記録だったとのこと。このため、各所で斜面崩壊や土砂災害がもたらされましたが、最大の被害は、市庁舎への浸水によって電気系統の機能が失われ、市役所の業務がマヒしてしまったことでした。市庁舎の建設時には、市の防災拠点として機能するよう設計（設計者は市出身の著名な建築家）したということがうたい文句でした。その市庁舎が猛烈な降雨によって近くの小規模河川の氾濫で被災して行政機能を失ってしまったことは皮肉なことでした。ただ、翌日の市長の会見では、「“想定外”の雨のため、市役所の業務遂行が損なわれ、防災拠点として機能しなかった」という言い訳でしたが、少々寂しい気持ちに襲われました。茨城県は、2011年の東日本大震災で甚大な被害に遭いましたし、2016年の鬼怒川氾濫で茨城県の常総市が、2019年には那珂川氾濫で水戸市などがそれぞれ大きな水害に見舞われた経験があります。そこで学んだことの一つに、“想定外を想定する”ということがあり、それを果たすのが政治の責任であることを自覚することが得られた最大の教訓だったはずなのに、茨城県内の自治体の首長がそれを学んでいなかった事実を確認し、残念な思いで一杯です。

話が飛躍しますが、記憶にも新しい2023年の春、WBCでJPBを優勝に導いた栗山英樹前監督もその著書（「栗山ノート2」、光文社、2023）の中で、“想定外を想定すること”の重要性を繰り返してうたっています。スポーツの世界ですらそうなのに、住民の生命と財産を預かる行政の長はもっと自覚すべきと思っています。ただ、過去の経験で得られた教訓を“わがこと化”するこのむつかしさをここでも痛感しています。

筆者は、LRRI「役員だより」2021年2月号で「想定外はなぜ起きるのか？」という小文の中で、想定外が起きる主たる原因のひとつは、“過信”と“油断”であると書きました。くわえて、“想定外”という言葉をやたらに使うべきではないとも書きました。とくに、防災とか減災とかにかかわっている技術者、科学者をはじめとして、行政担当者も例外でないと思うのです。

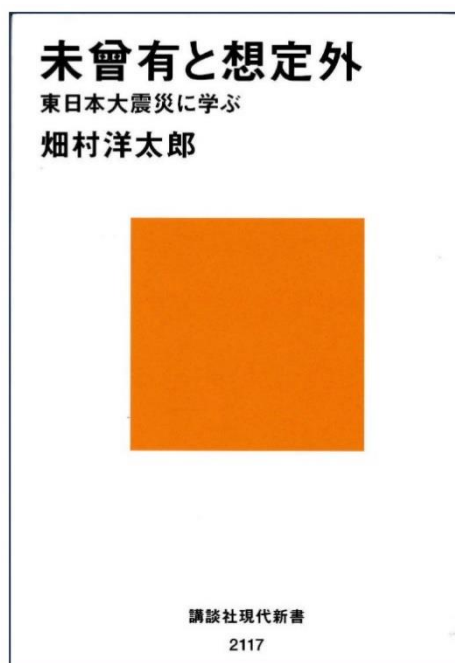
2011年東北太平洋沖地震直後に、鈴木康弘（地理、56-6、78-82、2011）はこの災害の想定外について考察しており、マスコミを中心に多用される「想定外」では、「未知」、「未想定」、「未周知」が混同されていると指摘されておられます。我々技術者・科学者は、いかなる場合も“安全神話”を作ってはならないし、鈴木康弘博士の指摘するような整理を十分に行なわないまま、やたらに「想定外」を使ってはならないことは自明ですから、マスコミに「想定外」の多用を許してはなりません。

「想定外」とともに、東日本大震災直後にしきりに使われたもう一つの言葉は、「未曾有」でした。「失

敗学」や「危険学」の提唱者である畑村洋太郎博士は、その著書「未曾有と想定外」（講談社 現代新書、2011）のなかで、『「未曾有」というのは、“いまだかつて起こったことがないこと”を意味しているが、2011年の津波と同様な事象は過去に東北地方で何度か起きていることから判断して、決して「未曾有」ではない』と述べられています。

筆者は、各地で頻発する災害を見聞するときに、上記の論文と著書をいつも読み返しています。筆者にとっては、バイブルともいべきものです。もちろん今回の事態の後も再読しました。

両先生の指摘される「想定外」や「未曾有」は、多くの場合、“対応できなかったこと”，さらに言うなら，“過去の教訓を生かしきれなかったこと”の言い訳に使われていると筆者は感じています。したがって、少なくとも、研究者が予測できなかった大きな災害に見舞われたときにまずいべき言葉は、「お役に立てず、まことに申し訳ありませんでした」に尽きると筆者は言い続けています。筆者自身の反省を含めて言わせていただきますと、防災・減災にかかわる基礎研究で、文部省（現・文部科学省）等から十分ではないとはいえ、曲がりなりにも国税をもとにした科学研究費補助金（科研費）等をいただいているながら、得られた成果がこのような大きな災害に十分に役に立っていないと思うとき、最初に出てくるべき言葉は、「まことに申し訳ありません。これからお役に立てるよう精進してまいります」しかないと思うのです。



教訓は 受け継がれてこそ 生きるもの

忘却の性^{さが} 謂うも空しく

（代表理事 安原一哉）